

果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

11月第6半旬、12月第6半旬および1月第5半旬を除き、休眠期間を通して気温は高く推移した(図1)。1月29日調査の「紅サシ」花芽重(100芽重)は3.64gで前年より重かった(図2)。

「紅サシ」の開花始期は2月14日であり、平年の2月22日より8日早く、前年の3月3日より18日早かった(表1)。

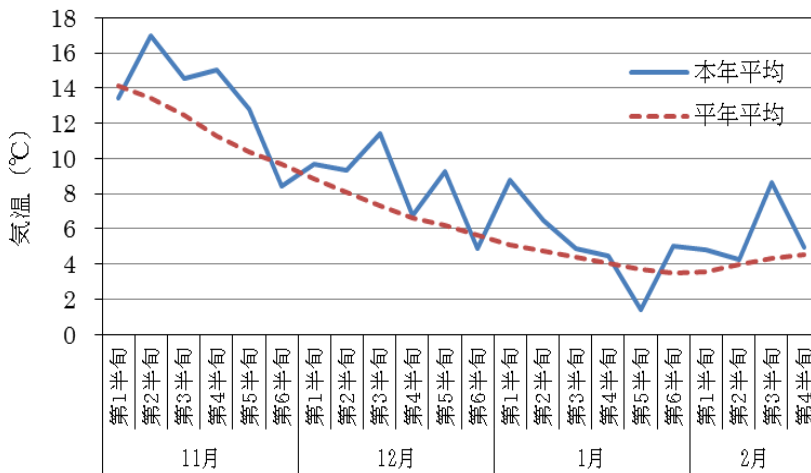


図1 前年11月からの半旬別気温の推移
(以下、各図表とも観測地点：美浜町久々子)

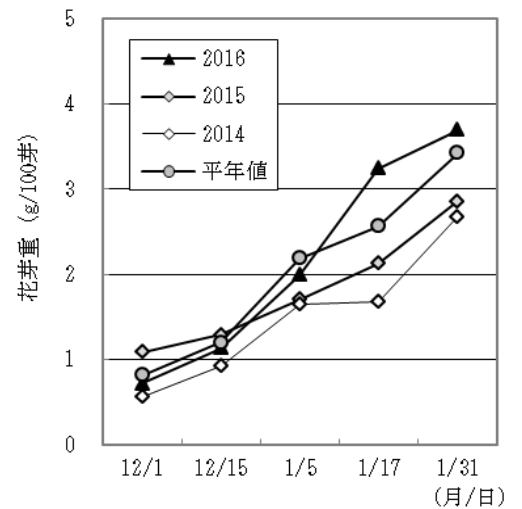


図2 「紅サシ」花芽重の推移

表1 「紅サシ」の開花状況

年 度	開花期 (月/日)		
	始期	盛期	終期
2012 (H. 24)	3/12	3/28	4/09
2013 (H. 25)	3/07	3/14	3/22
2014 (H. 26)	3/04	3/18	3/26
2015 (H. 27)	3/03	3/20	3/30
2016 (H. 28)	2/14		
平年値 (H9-H25)	2/22	3/12	3/25

(2) 地域状況

花芽の着生は全般にやや多いが、園地ごとのばらつきが見られる。

一時的に降雪があったが、積雪が少ないため枝の折損は発生していない。

2月24日現在、「紅サシ」は遊子など早場地域において開花盛期を迎え、標準的な地域でも開花盛期間近、遅場地域でも5分咲きの状況で、平年および前年より15日以上早い。

ミツバチ巣箱は2月12日および2月19日に導入された。

2 ナシ

(1) 生育状況 (農業試験場)

「幸水」の発育速度モデルによる花芽の発育調査では、平年より10日遅く、前年より15日遅い2月10日に自発休眠から覚醒した(DVI 2.0)。2月18日現在の発育指数は2.123(DVI3.0到達で開花)であり、

平年より2日早く、前年より4日遅い。

開花の早晩は今後の気温の影響が大きく、これから気温の高い日が多くなれば開花は早まる。

(2) 地域状況

せん定、誘引作業はやや遅れている。えき花芽の着生は平年並みである。

ハウスナシは3月に入ると保温が始まる。

3 カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

休眠期中であり、特に変わった点はない。

(2) 地域状況

せん定作業はほぼ終了した。

対策

1 ウメ

(1) ミツバチ巣箱の管理

結実の良否は、樹の貯蔵養分および花質・開花期間の気象条件に左右される。本県の推奨品種は自家結実性を備えているものの、結実率を高めるためにミツバチ放飼を行う。

巣箱は、風当たりの弱い場所を選び、出入り口を南面へ向け、巣箱の中へ雨水が浸入しないように入入り口をわずかに下がり勾配にして設置する。ミツバチが巣箱の外で活動している間に、少しでも巣箱の位置や方向を変えてしまうと、ミツバチが巣箱へ帰還できなくなるので、設置後は絶対に巣箱を移動させない。

雪が積もった場合は、天候の回復次第ミツバチが活動できるよう、入り口の前1 m四方をすみやかに除雪し、着陸場所を確保する。また、巣箱の設置中は薬剤を散布しない。

巣箱を返却する際には、前日の夕方または返却当日の早朝に巣箱の出入り口を閉める。

(2) 病害虫防除

開花時期が平年よりも早くなっており、開花終了後から展葉までの期間が長くなると予想されるので、開花終了期の防除タイミングを逃さないように注意する。

灰色かび病は満開から開花終了までの期間が長引くと多発するので、落弁期(花弁の80%が散った時期)に、また、かいよう病のり病枝が多い園では、葉芽が発芽する前に防除を行う。

(3) 施肥「芽出し肥」

春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために3月下旬に芽出し肥を施用する。成木の施用量は福井ウメ専用肥料「梅の力」で1樹当たり2.0kg(10a当たり40kg)を目安とする。エコファーマーの認定を受けている場合は、化学肥料施用割合の低減と有機物の施用に留意する。

(4) 石灰類の施用

ウメは石灰の吸収量が多い果樹である。しかし、石灰類(アヅミン苦土石灰・消石灰など)を連年施用してきた結果、土壌pHが7.0を超える圃場やカルシウムの残存量が基準値を超える圃場もみられるため、石灰類は土壌分析結果を参考に施用する。土壌pHが低く酸度矯正が必要な場合に10a当たり150~200kgを3月と9月に分けて園地全面に散布する。なお、春季に石灰類を施用する場合は「芽出し肥」とは10日以上の間隔をあける。

(5) 春季の接ぎ木

春季の接ぎ木は切り接ぎ法で行う。

接ぎ木の適期は、苗木養成では3月中旬から3月下旬、品種更新のための成木への高接ぎでは3月中旬から4月中旬である。適期に作業ができるよう、あらかじめ穂木や接ぎ木に用いる道具・資材などを準備しておく。

作業前日に、葉芽を3つ程度つけた状態で穂木を切断し、接ぎ木テープ(ニューメダル)を巻き上げた状態で、プラスチック製の食品保存容器などに入れ、冷蔵保管しておく。

切接ぎを成功させるポイントは、①穂木を乾燥させずに低温で保存しておく、②樹液の流動が始まった時期に接ぐ、③穂木・台木ともに接着面が平滑になるように、穂木・台木を調製する、④穂木・台木の形成層(樹皮直下の養水分の通り道)がお互いに密着するように固定することである。



写真 調製した穂木

2 ナシ

(1) 短果枝の整理

いずれの品種も着果量は1㎡当たり10果程度であるから、花芽数は1㎡当たり20～30芽あれば十分である。これ以上の花芽が着いていると、貯蔵養分を浪費するばかりでなく、受粉・摘果作業などに多くの労力を費やすことになる。

「豊水」や「二十世紀」など花芽数の多い品種では、開花前に花芽の整理を行う。「幸水」など花芽が少ない品種でも、短果枝の先端部に複数着生した小さい花芽は整理して、樹の負担を軽減する。

(2) 芽出し肥の施用

春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために、3月上中旬に芽出し肥を施用する。追肥用肥料を用いて年間施肥量の10～20%程度を目安に施す。

(3) 病虫害防除

3月中下旬のリン片がずれ始めたところに、「二十世紀」は黒斑病を対象として、パスポートフロアブル250倍液などを、「幸水」・「豊水」などの赤梨は黒星病・サビダニ類を対象として、石灰硫黄合剤7倍液を散布する。

3 カキ

(1) 整枝・せん定

せん定作業を終わっていない園地では、早急に作業を進める。

主枝は3本とし、垂主枝は1主枝につき2本程度配置する。隣の主枝から発生している垂主枝からは1.8～2.0mの間隔を保ち、平行に配置する。

低樹高化をめざす余り、主枝・垂主枝の先端新梢の角度が低くなりすぎている園が見られる。骨格枝先端の新梢の勢いが弱いと、徒長枝が乱立し樹形を乱す原因になるので、必ず骨格枝の先端は立てるとともに、骨格枝先端の新梢は切り返す。

せん定作業がひととおり完了した園でも、他人がせん定した視点で園内を見回り、主枝・垂主枝

の先端の切り返しや結果母枝数・側枝密度などを確認し、気づいた部分は補正せん定を行う。

(2) 晩霜対策

近年、春先に霜が降ることが多いので、霜害対策に万全を期す。

繁茂した雑草や敷きわらなどのマルチは、日中は地温上昇を妨げ、夜間は地熱放射を妨げて、霜害を助長する。春先はマルチはせず、草も短く刈り込む。冷気の流れる道筋に防風垣などの遮へい物があると冷気をせき止めて霜害を助長するので、防風垣のすそ部を刈り込み、冷気が流れやすいようにする。

スプリンクラーによる散水氷結法(※)を行っている園では、早めにスプリンクラーの点検を済ませる。

3月下旬以降は、発芽が近づき霜害を受けやすくなる。夜になって空が澄みわたり底冷えするような場合は、霜害発生の危険性が高くなる。この時期は戸外に温度計を設置しておき、午後8時の気温が5℃以下の場合は散水の準備に入り、気温が0℃近くまで下がってきたらスプリンクラー散水を実施する。

※ 水が凍結する時に放出する潜熱を利用して、樹体が0℃以下にならないようにして霜害を防ぐ方法

(3) 病虫害防除

越冬病虫害を対象として発芽前に石灰硫黄合剤の7倍液を散布する。薬剤がスプリンクラーヘッドにかかるると錆びつくので、石灰硫黄合剤の散布時は、必ずビニール袋などでヘッドを覆い、故障を防止する。

アザミウマ類やカイガラムシ類の耕種的防除として粗皮削りを行う。特に、枝の分岐部や薬剤のかかりにくい主枝下部では、越冬害虫の生息密度が高いので念入りに実施する。

(4) 石灰類の施用

昨秋に石灰類を施用していない園では、土壌pHを測定して、適正量を施用する。

4 イチジク

(1) せん定

凍害の恐れのある地域では、厳寒期を過ぎた3月上旬に仕上げせん定を行う。

一文字仕立ての結果母枝密度(ハウス栽培)は2,000本/10aである。密度が高いと着果不良や着色不良の原因となる。今のうちに密度を確認して、結果母枝数が多い場合は整理する。

(2) ハウス管理

最低気温が氷点下にならなくなった(3月中旬頃)、ハウスを締め切り、夜間の保温を開始する。日中は25～30℃を目安とし、晴天日はハウスサイドや天窓を開けて温度が上がり過ぎないように管理する。発芽後は、40℃以上の高温が数時間続くと高温障害を受け、芽が枯死するので注意する。

また、保温を開始する2～3週間前からかん水量を増やし、土壌水分をやや高めに保つと発芽揃いが良くなる。ハウス内の土壌が過湿にならないようにハウス周辺の排水溝の整備を行う。

5 ブドウ

(1) ハウス管理

3月中旬以降に十分かん水して、ハウスを締め切り、保温を開始する。発芽期は湿度を必要とするため、土壌が乾燥したらかん水を行うが、発芽後は湿度が高すぎると灰色かび病などが多発しやすいため、適度なかん水とする。